

禅と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XIX

臨濟禅と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、

偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも大きな影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思えます。

鉄舟の剣2

師匠である浅利又七郎に認められ、免許皆伝となった鉄舟は自らが開祖となり「無刀流」という流派を開きました。

「無刀とは、心の外に刀なしと云う事にして、三界唯一心なり。内外本来無一物がなるがゆえに、敵に対する時、前に敵なく、後に我なく、妙応無方、朕迹（兆しと跡形）を留めず、これ余が無刀

流と称する訳なり」とその命名の理由を述べています。自らが刀そのものになりきるという事で、禅の深淵に至った鉄舟の境涯そのものとも云えるものでしょう。さらに無刀流剣術大意というものがあり、それには

一、無刀流剣術は勝負を争わず。心を澄まし胆を練り、自然の勝を得るを要す。

一、事理の二つを修行するに在り。事は技なり、理は心なり。事理一致の場に至る。これを妙処となす。

一、無刀とは何ぞや。心の外に刀なきなり。敵と相對する時、刀によらずして心をもつて心を打つ。これを無刀と謂う。その修行は刻苦工夫すれば、たとえば水を飲んで冷暖自知するがごとく、他の手を借らず。自ら発明すべし。

これらの言葉からわかる様に鉄舟は門弟に精神的修養を求めています。当時流行っていた道場では技量の向上に重き

がおかれ精神面はなおざりにされてきました。これは明治9年（1876年）に発布された「廢刀令」により、真剣を扱ふ事が事実上なくなった事が大きいと考えられます。剣を交じえるのは命がけの事では無くなり、道場で防具を着け、

竹刀で打ち合う事となりました。真剣に比べて軽い竹刀を真剣ではあり得ない程長く作り、打ち合いに勝てばエライという風潮を鉄舟は嘆き、このままでは剣術の未来はないと心を痛めていたのです。

そこで無刀流を開くにあたり、剣道中興無刀流開祖として「余の剣法や、ひたすらその技をこれ重んずるにあらざるなり。その心理の極致に悟入せんことを欲するにあるのみ。換言すれば、天道の発源を極め、併せてその用法を弁せんことを願うにあり。なお切言すれば、見性悟道なるのみ。以下、言うべからず」と修行規則を定めました。剣道を通して悟りに至った鉄舟の面目躍如といった所でしょう。以下次号（一峰 義紹）